

19世紀のシャムにおけるキリスト教宣教師のシャム人への態度 ——Missionary Attitudes Towards the Thai People in the 19th Century——

平成24年入学
派遣先国：タイ国
アレクサンダー・キーラン

キーワード：宣教師、態度、シャム、キリスト教、仏教、アニミズム、

対象とする問題の概要（～400字）

タイでキリスト教へ改宗した人は、ほとんどがタイ人ではありません。多くは、中国人やベトナム人の移民、アニミズムを信じる山地民族です。いくつかのミッションがありましたが、どうしてこんなに低いのでしょうか？

19世紀のシャム（現在のタイ）におけるキリスト教宣教活動に焦点をあて、シャム人における態度が宣教失敗の要因であるかどうかを調べようと思っています。宣教の不成功は、地元の人々や地元の宗教への胎動が、根本的な要因になるのでしょうか？

この問いを明らかにするため、宣教師の日記を精読し、特にシャムの人々、地元の宗教、地元の文化に対する宣教師の意見や考え方を精査しています。

研究目的（～400字）

キリスト教宣教師がシャムで書いた日記の分析を通して、教師がシャム人に布教しようとした時の地元民への態度を明らかにすることです。この日記から、シャム人または非ヨーロッパ人に対する一般的な偏見が読み取れるでしょう。この偏見こそは、宣教師が目的 - 布教 - を実現できなかった理由の一つでしょう。これを指摘するのが、私の研究です。

宣教師について研究しようと考えた理由は、次の二つの点に関心があったからです。すなわち、①どうしてタイではキリスト教を信じる人が少ないのか、という疑問です。②クリスチャンが少ないことは、シャム人に対する宣教師の態度に原因があるだろう、という着想です。

研究手法は、PAYAP大学にある宣教師の日記や文書（Records of the American Presbyterian Mission at the Payap Collage Archives と Papers of Paul A. Eakin at the Payap College Archives を主に）を収集して、分析します。

フィールドワークから得られた知見について（～800字）

チェンマイで調査したときは残念ながらPAYAP大学の資料館が引っ越し中で入館できませんでした。しかし図書館に入館が出来ましたので読みたかった本をたくさん読んで、研究に対する視点が少し変わりました。

実は私はこの研究を始めた時、宣教師の地元の人たちへの人種差別だけに注目していました。しかしながらチェンマイである本をよんで、仏教の僧侶たちがアニミズムから仏教に改宗させた方法について学びました。そして、キリスト教の布教に対して、宗教的な差別が人種的な差別と同じく

らい悪影響を与えたことに気づきました。

宣教師の日記の本を分析して、宣教師が対人への態度、または仏教がアニミズムへの態度をいくつかの例を見つけました。主にカール・ギュツラフ、ヤコブ・トムリンとデビッド・アベールという3人の宣教師が非常に悪かったです。この3人が書いたことを読んで、シヤム人または非ヨーロッパ人に対する一般的な偏見が、宣教師が布教を実現できなかった理由の一つであるという証拠だと思いました。

これからの研究はタイ語で書かれている資料を使わないといけないのでチェンマイにいた時もタイ語の6週間コースに入学しました。

そして、チェンマイ大学のタイの歴史を研究している先生、学生に会って、名刺を交換しました。ここで会った先生のおかげでチェンマイ大学の図書館に入館することができ、論文に使えるような書類を手に入れることが出来ました。

バンコクにも行って国立図書館や資料館を訪ねて、新しい資料を集めました。

今後の展開・反省点 （～400字）

これからも幅広く宣教師の日記を読んで、関連情報を集めていきます。また、改宗方法に関するカトリックとプロテスタントとの違いの有無についても、注意していきたいと考えています。

また、偏見の少なかった宣教師が他の一般的な宣教師よりも改宗に成功しやすかったかどうか、この点について研究したいと思っています。